小さき傭兵と保護者の青年

シンマドー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年、浅日怜はあの日の事件から深月フェリシアの保護者になった。

怜はフェリシアがあの日魔法少女になることを選んだことを後悔しており彼女が魔女との戦いで無事に帰ってくること、そして彼女と親しく笑えあえる友達が出来るよう日々彼女の幸せを願っていた。

そんなある日のこと、怜は買い出しの帰りの電車であの日見た魔女の気配を感じた。魔女の所に向かおうとしている少女を見た怜はあの日の惨劇を繰り返さないようその跡を追った。

その行動により浅日怜は神浜市で起きている噂に巻き込まれるのであった。
あの日見た魔女を探すため、浅日怜は魔法少女と共に立ち向かう。

目次

1話 …… 1
2話 …… 5
3話 …… 10
4話 …… 20
5話 …… 25
6話 …… 31
7話 …… 39

1話

俺は今でも覚えている。

忘れたくても忘れられないほど鮮明に、そして脳にこびりつくように写し出される。

辺り一面が炎に包まれているなか俺と少女は動けずただただ座り込んでいるだけだった。

ーー母ちゃん！　母ちゃん！

少女必死に立ち込める炎に向かって母を呼び続けた。その時の俺は必死に叫び続ける少女を抱きしめ逃げ道を探そうと必死に周囲を見回した。

ーーッ!?　なんだ…あれは？

それは幸か不幸か分からないが周囲を見回しているとき見えてしまった。

燃え盛る炎の中で蠢くナニかを。

あれは人ではないと一目見て分かった。大きさ、形、そしてそれの存在が人とは断然違う、あれは化け物の類いだと認識させた。

ーーなんだよ…なんなんだよお前ッ!?

少女も化け物に気付いたのか、そいつに向けて叫んだ。
だが化け物はなにも反応はせずやることを終えたのか徐々に薄くなりはじめ、最終的に完全に姿を消した。
ーーあれは魔女だよ。人の心を内から喰らう怪物さ。
化け物が姿を消すとまた新たな声が聞こえた。声が聞こえた方に向くとベランダの柵の上に四つの足で器用に立っている謎の生物がそこにいた。
ーーその少女には、魔女と戦う力が眠っている。
ーー僕はそれを引き出してあげるよ。
謎の生物が少女に向けてそう言った。
ーー俺が？
叫び続けたせいか少女の声は今にも消えそうな声だった。
ーーさあ、君はどうするんだい？
謎の生物はそう言い選択肢を少女に出した。
ーー魔女を…
俺は少女が何を言うか分かっていた。必死に反対しようと声を出そうとするがなぜか声が出せず少女の耳には届かなかった。
ーー魔女を殺す！

そして少女は魔女に復讐をするために魔女と戦う道を選んだ。

▲

あれから月日が経った。
俺はあの日の出来事をいまだに忘れられないまま学校生活を送っていた。
あの時俺は気絶したのかあの日で覚えているのはあそこまでだった。次に目を覚ましたときには周囲の炎は無くなっており火事になる前の状況に巻き戻っていた。
あの火事はただの夢だったのかと最初は思っていたが現実は甘くなかった。
少女の両親がいない。そう少女が言ってきた。俺はすぐに少女の両親を探すため警察にお願いをし、そして今は出張でいないが少女の両親と仲が良かった俺の親に聞いたりもしたが結果はどちらもダメだった。
結局少女の両親の行方は知らず失踪と扱われることになった。
それ以降俺が少女の保護者をすることになった。
保護者をすることにはなにも不満などなくただ少女が無事に、そして幸せに生きることを願い続けながら共に日々を送った。
そんなある日のこと、夕飯の買い出しの帰りの時だった。

列車の中で揺られながら今日の夕飯を考えているとふと、身に覚えのある気配を感じた。それはあの日見た魔女と同じ気配だった。

直ぐに俺はその気配がどこから来てるかたどる、するとその気配は次の列車に続いていることが分かった。俺はあの日の記憶から誰かが襲われているのではないかと思いその列車に続く扉に近づこうとしたとき。

（嘘だろ！）

一般人には気配が分からないのだろうか制服を着た少女が気配が出ている扉へと入っていったのだ。

それを見た俺は急いで扉を開け中へと入っていった。

これは運命だったのか、その日青年、浅日怜（あさひれん）は知る。

魔法少女と魔女の戦いを、そして自分が住んでいる神浜市で今起きている噂に巻き込まれることを。

これは深月（みつき）フェリシアの保護者である浅日怜の物語である。

2話

中に入るとそこにいたのは通路の真ん中で一人力なく座り込み泣きじゃくる幼き少女がいた。
「君、大丈夫かい？」
無事を確認するため少女に近づき視線が合わさるようにしゃがみ安心させるよう優しく声をかける。
「ひっ…うっ…お姉ちゃんが…猫を、助けに…飛び降りて…」
それを聞き、一目散に少女が指差した扉に走り力強く開ける。
「どうなっているんだ…これは」
開けた先に待っていたのはあまりにも現実離れした光景だった。
宙に架けられた線路を走る列車と、空間全体を浮遊し蠢く大量の金属塊。
その光景に呆然としてしまったが直ぐに立て直し先程この列車に入った制服の少女を探した。
（あれはッ!?）

探しているとある場面を目にした。遠い方で顔は見えないが二人の少女らしき人物がおたまじゃくしのような形をした魔女と戦っていた。

黒い装束の少女は魔女と戦っていてもう一人の薄桃の装束の少女は遠くて見えないが何かを腕に抱えている状態だった。

しばらく見ていると二人の少女は目的を達成したのか魔女から逃げるようにこちらに向かってきた。

(こっちに来る!)

俺は扉から何歩か後退りすると破壊音が轟いた。

そこから来たのは先程の二人で、黒い装束の少女は知らないが、薄桃の装束の少女は制服ではないが自分が追っていた少女だと分かる。その少女の腕には幼き少女が言っていた猫が抱かれていた。

▲

(はぁ、まったく今日は変なことに巻き込まれたな)

あの後無事に家に帰り、夕飯の支度をしながら今日の出来事を思い出す。

猫を助けた少女たちに色々と質問をしたが黒い装束の少女に、今日起きたことは忘れ

なさい、と言われ薄桃の装束の少女も、すいません、と言ってなにも情報を得られなかった。でも収穫はあった。

あの日謎の生物が言っていた魔女と、それと戦う魔法少女の存在を確認できたことが今日一番の収穫だった。

「よし、完成っと」

夕飯の支度が終わるとそれと同時に玄関のドアが開く音が聞こえた。そしてドタドタという足音がリビングに続く扉に近づいていることが分かり、その扉が強く開け放たれ姿を表した。

「怜兄たっだいまー！　今日のご飯はなんだあ！」

入ってきたのは金髪でツインテールをした活気のある少女、深月（みつき）フェリシア。小さい頃マンション引っ越したさい偶々隣室のことから付き合いも長くよく遊びに付き合っていた。そしてあの事件を共に経験した一番の被害者である。

両親を失い一人取り残されたフェリシアだったが長い付き合いとあの日の事件を警察した一人として今は俺が彼女の保護者役として生活を共にしている。

「肉が安売りしてたから今日はハンバーグにしたよ」

「まじか！　やったーっ！」

あまりの嬉しさにウキウキと体を動かしてる姿はいつ見ても可愛いと思う。こうい

う子供らしい所もフェリシアの可愛い所なんだよなあ。
「後は配膳だけだからその間に手洗いを済ましとけ」
「わかった！」
そう言いフェリシアはリビングから出た。

▲

「ふぃーごちそうさま～」
「相変わらず大食いだなフェリシア」
夕飯を食べ終え一息つく二人。
「あったり前だろ、魔女と戦ってるんだから普通の量じゃオレの腹は満たされねーよ」
「そうか…それもそうだな」
魔女の単語を聞き今日のことを思い出す。
今日みたおたまじゃくしみたいな魔女とは別にたくさんの魔女が俺たちの日常に潜んでいる。そのなかにきっとあの日見た魔女もいるはず、フェリシアのためにもなんとか情報を見つけないと。
（もしまたあの二人に出会ったらなんとしてでも情報を聞き出さないとな。）

「…？　怜兄？　どうしたんだそんな思い詰めた顔をして？」
「ん？　ああ、いつもフェリシアが魔女と戦っているからケガをしないか心配でな」
「たくっ、怜兄は心配症だなぁ、オレがあんなやつらにケガするわけねーよ」
「ああ、まったくだな」
誇らしげに言うフェリシアに俺は笑顔で返した。
（でもなフェリシア俺はそれでも心配なんだよ、お前の両親のためにもこれ以上悲しい思いをさせなくないんだよ）
そんな不安な思いを抱きながら、一日を終えることになった。

3話

ピピピッ、ピピピッ、ピピガチャーー

朝の目覚まし時計を止めて目を覚ます。

「はぁ、まったくお前の寝相の悪さには困ったもんだよ」

そう言い体を起こし隣を見る。

「スゥ…スゥ…怜兄ぃ……」

そこにはまだ寝ているフェリシアの姿があった。

それは昨夜のこと、寝ようと思ったらフェリシアが自分の枕を持って部屋に入ってきてや、今日は一緒に寝てくれるよな、な?、と言われ今日は別に断る気はなかったので了承したが、寝ようとする直前俺は思い出した。

フェリシアは結構寝相が悪い。

寝る前は俺の体を抱き枕にするだけだまだ安全だ、だが寝て少ししたら危険だ。寝ぼけているのか抱きしめる強さが強くなってまともに寝ることが出来ない。

(こんなことがあっても明日には忘れて昨夜のようになるんだよなぁ……まあでも)

寝ているフェリシアの頬を起こさないよう優しく触れる。
（かわいい寝顔が見れるだけでもよしとするか）
気を取り直してフェリシアを起こさないようベッドから抜け出し朝食の準備をするため寝室を出た。

▲

「ん～、おはよう怜兄、目覚ましに牛乳ココア作って～」
「はいよ、作ってあげるから顔洗って着替えてきなさい」
フェリシアは眠たそうな顔をしながら、はーい、と返事し洗面所に行った。その間のフェリシアがいつも飲むココアミルクを作る。
「はい、どうぞ」
「サンキュー、怜兄」
フェリシアにココアミルクを渡したあと自分も朝食を食べ始める。
「あ、そうだ。すまんフェリシア、今日俺帰ってくんの少し遅くなるから夕飯、冷蔵庫に入っているおかずを温めて先に食べててくれないか」
「んー？　怜兄今日遅いのか？」

フェリシアは少し寂しそうな顔で言ってくる。
「バイトがあるからな。そこまで遅くはならないけど…お前が我慢出来るならバイト先でおかず貰ってくるけど」
「ホントか!?」
フェリシアは立ち上がり嬉しそうに目を輝かせる。
「ああ、そこのバイト先、俺のクラスメイトが親子で経営してる場所でなよく貰ってるんだ」
「わかった、我慢するからおかず持って帰ってきてくれ！」
「ああ、任せてくれ」
（こりゃ、一段と頑張んないといけないな）
そんな約束をしたと同時に朝食も食べ終え、片付けを終えたあと学校に向かうため俺とフェリシアの二人は家から出た。

▲

「ふぁ～あ…眠い」
眠いのを我慢しながら学校につき、自分の席についたとたんすぐに寝る体制に入る。

「おはよう、怜君！　起きてるよね？」
目をつむろうとした瞬間、知っている声が聞こえる。
無視する気もないため顔を上げ挨拶する。
「起きてるよ、おはよう鶴乃」
そこにいたのは、長い茶髪と溢れるほどの明るさと元気が特徴の由比鶴乃（ゆいつるの）が立っていた。
「で、なんのようだ？」
「うん、今日のバイトなんだけど配達もお願いできるかな？」
「ああ、任せろ」
「ありがとう怜君！　お礼に今日渡すおかずの量増やしとくね」
（まじか、あの量が限度だと思ってたのに）
いつもバイト帰りに貰ってるおかずの量が大きい袋一枚で収まるほどなのにまだ上があることをしり少し驚いてしまった。
（だがまあ全部フェリシアが食うから問題ないか）
そこからは鶴乃となんの変哲もない世間話をし、いつも通りの学校生活を送った。

▲

学校も終わり、バイトも少し仕事量が増えたがなんの問題もなく無事終わらせその帰り。

「ふう、すっかり遅くなっちまった。おかずはたんまり貰ったしはやく帰ろう」

両手にパンパンに詰まった袋を持って少し早歩きで家に向かう。

（ん？　なんだあれ？）

ふと夜空を見上げると金属で纏っているのか、謎の球体が目にした。

謎の球体はバランスを崩したのか急激に降下し近くに落ちていった。

（もしかして、あれも魔女なのか…見に行ってみよう）

もし魔女だったらまたあの子たちに出会えるかもしれないと思い謎の球体が降ってきた地点に向かった。

（確かここらへんなはずなんだが…あそこにいるのはもしや）

降ってきた地点は広場のような場所であり、広場の中央にある花畑に見覚えのある二人の姿が見える。

見た感じ黒い装束の子は気絶してるのか薄桃の装束の子が必死に呼び掛けても目を覚まさない様子だった。

（魔女にやられたのか、助けないと！）

荷物を通路の端に置いたあと彼女たちの方へ急いで向かう。
「ッ!?　あなたは!?」
薄桃の装束の子が言った瞬間、目に映る景色が変わった。
「この気配…魔女か！」
前に見た光景とは違うがここに魔女がいることは変わらない。
（とにかく、まずは助けることが優先だ！）
「君たち、大丈夫か!?」
「は、はい。私は大丈夫ですけど黒江（くろえ）さんが…」
「分かった。俺がこの子を背負うから君はこの場所から出る道を案内してくれ」
「分かりました。お願いします！」
俺は黒江という黒い装束の子を背負い、薄桃の装束の子を先導として後ろをついていく。
しかし、それを魔女は許すはずもなかった。
突如目の前に魔女が地中から出てきた。
「下がってください！」
彼女がそう言い腕に付いているボウガンで応戦する。
俺は邪魔にならないよう後ろに下がるが、今度は後ろからも魔女の気配を感じた。

（コイツっ、昨日のーー）

後ろに振り返ると上から昨日見た魔女が降ってきた。

（さすがに2体同時を相手するのはあの子には厳しすぎる。どうする？　どうやってこの状況を切り抜ける!?）

最悪俺を囮にして彼女たちを逃がせば、そう思った直後魔女は俺たちとは違う方向を向いた。

（なんだ…奴等は何を見てーー）

俺は唖然とした。魔女たちが向いている方を見るとそこには小さいがあの日見た謎の生物そっくりの奴が静かに立っていた。

魔女たちはそれを見るや謎の生物に向かって攻撃し始めた。謎の生物は小さい体を駆使して攻撃をかわし薄桃の装束の子に向かって高らかに飛び上がる。

彼女は両手をあげてキャッチするとなにかが起こったのか固まるように動かなくなってしまった。

「おい、大丈夫か！　おい！」

彼女に声をかけるが返答はなし、そうしてる間にも魔女たちは俺たちを見ている。

もうダメか！、そう思った瞬間魔女たちになにかが貫くように当たり倒れ付した。

「ゴホッ！　ゴホッ！　くそっ、今度はなんだ」

魔女が倒れたことにより土煙が舞い何も見えなくなりむせる。
少し時間が経つと土煙も収まり視界が広がると目の前に一人の女性が立っていた。
（さっきの攻撃あの人がやったのか？）
蒼いドレスのような戦闘衣を纏った青髪の女性は振り返ることなく持っている槍を巧みに使い2体の魔女を翻弄する。
それに対し魔女はなにも出来ずに青髪の女性によって倒されていった。
それと同時に景色が元に戻っていった。
「あなたたち、どこから来たの？」
女性は蒼いドレスから私服に変わり、俺たちの方へ振り返り言う。
「あ、あの、宝崎から来ました。助けてくれてありがとーー」
「ここは神浜西のテリトリーよ、他の魔法少女のテリトリーで勝手に魔女を狩るのは敵対行為になるってキュゥべえに教わらなかった」
隣にいる薄桃の装束の子もいつの間にか制服を着ており、青髪の女性にお礼を言うが青髪の女性は無視して話を続ける。
「す、すいません」
「それにそこのあなた、魔女の口づけを受けてないのにどうやって結界の中に入ったの？」

今度は俺に話しかけてきた。どうやって入ってきたと聞かれても気づいた時にはもうあそこにいたのでここは素直に答える。
「すまないが俺にも分からないんだ。魔女の口づけとか結界とか今初めて知ったよ」
「そ、ならあなたは早く帰りなさい」
「なっ、待ってくれ。まだ俺は聞きたいことがーー」
「帰りなさい、一般人のあなたが関わる必要はないわ」
どうやらなにも答えてくれない感じだ。
（確かに彼女から見たら俺はただの一般人だ。そんな一般人を危険に巻き込むことはしたくないんだろうな…仕方ない、ここは引くか）
「……分かったよ。すまない俺はもう帰るからこの子を頼むよ」
「は、はい…えっとこちらこそ助けていただいてありがとございます」
背負っている少女を降ろし、制服の少女に後は任せ荷物を回収したのちこの場を立ち去った。

その後何事もなく家につき中に入ると玄関先で腹を空かせて倒れているフェリシアを見つけ、急いでご飯を作るのは言うまでもなかった。
（冷蔵庫のおかずに手を出してない限り、そんなに楽しみだったのか？）

「怜兄、おかわり！」
「はいはい、まだあるからゆっくり食べなさい」
（まあいっか）

4話

（ふぅ～疲れた時の風呂は最高だなぁ～）
遅めの夕飯も終わりゆったりと湯船につく怜。
彼にとって風呂はいわば休息の場所だ。
誰にも邪魔されない空間でゆっくりと体を癒し、明日に備える。それが彼のルーティンだった。
ガチャッ
（ん？　なんで扉開いたん……だーー）
しかし、そんな彼の休息に誰かが混ざろうとしていた。
閉じていた瞼を開けその正体を確認する。
そこにいたのは…
「怜兄入るぞ～」
「ッ！」
夕飯を食べて眠っていたフェリシアがそこにいた…裸で。

　怜はフェリシアの姿を見て急いで目をそらす。
「ん？　どうしたんだ怜兄、風呂の壁をずっと見つめて」
「お前は少し恥じらいを持て！　そして入ってくるならせめてタオルで体を隠せ！」
「えーいいじゃん別に。　家族なんだから関係ないだろ？」
「あるわ！」
（家族でも異性の裸を見れば誰だって目をそらすわ！　別にここは風呂場だから裸になるのは当然だけどさぁ、俺が入っているのを知ってたらせめてタオルで…タオルで隠してくれ！）
　今回の事態にどう対処したらいいか分からず頭が混乱する怜。さらに湯船につかっていることもあって混乱は加速する。
「怜兄、オレも入るから詰めてくれ」
「あ、ああ…悪いーーッ！」
（なに自然に入っているんだフェリシアあァ!!）
　あまりにも自然だったためつい浴槽に入れてしまった。
　出ようとしてもフェリシアと背を合わせている状態なので出ようにも出れない。
「こうやって一緒に入るのはいいもんだな、怜兄」
「そ、そうだな」

（どうにかして風呂から出なければこのままではのぼせてしまう！）
「なあ怜兄、こっち向いてくんねえか…」
（なっ、どうしたんだ急に!?）
さきほどまで元気に話していた彼女が突然もじもじと恥ずかしそうに言ってきた。
それを聞いた怜は声には出してないが驚いた。
（分からない、振り向いたら何が起こるのかまったく分からない！　こうなったら覚悟を決めて…）
「どうしたんだ、フェリシア？」
頭を冷やし意を決して振り向く。
振り向いた先に待ってたのは。
「ドーーーン!!」
お湯だった。
彼女は怜が振り向くと同時にお湯をかけてきたのだ。
「やったー！　怜兄どうだった、どうだった？」
怜の顔にもろにお湯をかけたことに嬉しがるフェリシア。それに対しもろに喰らった怜はというと。
「…フェ…リ…シ…アぁ！」

怒っていた。
当たり前である。誰だって不意にお湯を顔面に強くかけられたら怒る。
「お返しだ！」
怜はそう言いフェリシアに思いっきりお湯をかける。
「うわっ！　やりやがったなぁ…おりゃあぁ！」
お湯をかけられたフェリシアは嬉しそうに言いまた怜にお湯をかける。
それの繰り返しで最終的に二人は疲れ果て、早く寝たいため二人は風呂から出るのであった。

▲

「……」
「う～ん…怜にぃ……」
深夜、昨日と同じく一つのベッドに怜とフェリシアは体を密着させるようにお互いに抱き合って寝ていた。そんな中、怜だけは今だに起きていた。
（関わるな…か。ちくしょう…）
怜は今日であった青髪の女性に言われたことを思い出していた。
（確かに今日の魔女と魔法少女の戦いを見て彼女たちのような力がないと生き残れない

と分からせてくれた。でもなあ、こんなチャンス滅多にないんだ。見逃すわけにはいかないんだ…それに）

怜は目線を少し下に下げる。

「ん……あったかぁい……」

そこには怜の胸板に顔を埋め寝心地が良さそうな顔で寝言を溢していた。

（フェリシアがあんな魔女と戦っていることを知って引き下がるわけには行かないんだ）

そんなことを考えていると眠さが達したのか次第に瞼が閉じようとする。

（明日は…絶対に……聞き出さない…と）

瞼が完全に閉じ、意識が落ちるのもそう遅くはなかった。

「……ずっと一緒だぞ…怜兄」

フェリシアの寝言を最後に怜は眠るのであった。

5話

燃え盛る炎の音。
それの音で青年は目を覚ます。
「またか……」
この言葉、この景色は何回目なんだろうか。
何十、何百、何千と、もう数えるのも面倒なくらい見て言ったと思う。
自分を中心に炎が囲む。炎は熱さはなく、そして恐怖もなく、ただ自分の周りで燃えている。
「なぁ……俺はいつになったらこの悪夢を見なくてすむんだ?」
上を見上げ誰かに問うように喋る。
空は真っ黒な暗闇に染まっており、そこに一つの目が青年を見下ろしていた。
その目はなにも反応はせずただじっと青年を見つめ続けた。
この悪夢から覚めるまでずっとーー

▲

「なぁ怜兄、昨日どこ行ってたんだ？」
「え、普通に学校とバイトに行ってただけだが…どうした急に」
　朝食を食べているとき急にフェリシアが聞いてきた。
「怜兄から知らない女のにおいがする」
「お前は犬か」
　相変わらずフェリシアの嗅覚はどうなっているんだ。
　確かに昨日少女を背負っていたけどそんな簡単ににおいはつくもんなのか。
「で、なにしてんだフェリシア」
　いつの間にか俺のそばに来てにおいを嗅ぎはじめるフェリシア。
「くんくん…怜兄から他のにおいがしないか探しているんだ」
「やめなさい」
　においを嗅ぐフェリシアに軽めのチョップをする。
「うぅ…じゃあ怜兄、今日どっか連れてってくれ！」
「はあ、まあ別に今日は休日だからないいけどどこに行くんだ？」
「そんなの後から決めればいいだろ」
「そんな行き当たりばったりに、とりあえず朝ごはん食ってから行くぞ」

「ホントか!?　やったー!」
嬉しそうに席に戻り急いで朝食を食べるフェリシア。
それを見た俺は少し笑いゆっくり食べろよ、と注意してから自分も食べ始めた。

▲

「で、結局ここか」
朝食を食べ終え、フェリシアのお任せで出かけたが最初についたのがゲームセンターだった。
まあ別に分かりきっていたので呆れはしないが。
「別にいいじゃねえかよここにくるのは久しぶりなんだし」
「久しぶりって、ちゃんとおこずかいはあげてるだろ」
「一人だとつまんないんだよ!」
そう言い頬を膨らませるフェリシア。よく見ると恥ずかしいのか少し赤面していることがわかる。
確かにここ最近はバイトとかで一緒に遊ぶ時間がなかったしな、それに今日はフェリシアが行きたい場所を決めるから存分に付き合ってあげないと。

「それは、悪かったな。なら今日は一杯遊ぶとするか」
「おうっ！　ほら怜兄行くぞ！」
笑顔のフェリシアに手を引かれ、俺は手を引くほうへついていった。

▲

「怜兄、これやろうぜ！」
「怜兄、次はこれ！」
「怜兄、今度は――」
「ふう、朝っぱらから元気すぎだろまったく」
時刻は昼時、俺は近くにデパートのフードコートで休憩していた。
正直フェリシアの体力をなめていた。まさか休憩なしで連続でやるとは思わなかった。
フェリシアは今何を食べるかでうろうろ歩いているが俺は歩く気すら起きなかった。
(体力には自信があったんだが…見事にその自信がなくなったよ)
「あれ？　怜兄、めしはどうしたんだ？」
そんなことを思っているとフェリシアが帰ってきた。

「これから行こうとしてたところだ。フェリシアは何にした…ってまあいつも通りだな」
　フェリシアの持つトレイにはハンバーグ定食がのせてあった。
「当たり前だろ怜兄、ハンバーグはいつくってもおいしいからな」
「それもそうだなっと」
　フェリシアが戻ってきたので俺は席を立ち何を食うか選びに行った。

▲

　昼飯が終わりこれからどうするか悩んだがせっかくデパートに来たので買い物をすることにした。
　本屋に行ってフェリシアが欲しい漫画を買ったり、フェリシア自身は気にしてはいなかったが新しい服を買ったりもした。そして夕飯のおかずを買う頃にはもう時刻は夕方になっていた。
　その帰り道。
「今日はありがとな、怜兄」
「いいってことよ、ゲーセンに行ったのは久々だからな、結構楽しかったよ」

「えへへ…オレも怜兄といっしょにやってて楽しかったぜ」
隣で歩いているフェリシアは俺のほうを向いて微笑む。その微笑みにつられて俺も微笑んだ。
お互いに微笑み前を向くと突然手を握られる。
（フェリシア？）
隣を見るとしっかりとフェリシアの手が俺の手を握っていた。
表情を確認しようとするも身長差と帽子を深く被っているため顔を確認することができなかった。
だが見るからに恥ずかしがっていることが分かる。
（まったく…）
俺はさりげなくフェリシアの手を優しく握る。
お互いに片方は荷物を持ち、もう片方は手を繋いで歩いている。
それを見ていた人からはとても仲の良い兄妹に見えていただろう。
それから家に帰るまではずっと手を繋いでいた状態だった。

6話

「……」

気づいた時にはそこは知らない場所だった。

建物や人の姿はなくあたり一面に無数の階段があるだけ、どの階段も果てしなく続いており上ろうとは到底考えるはずもなかった。

「まったく…今日に限ってなんでこんな目にあわなくちゃいけないんだあぁぁ!!」

散々な目にあっているあまり俺は叫ぶがその叫びは虚しく消えていった。

▲

時は巻き戻り、朝食を作っている時だった。

（なんか頭痛いな）

今日起きてからずっとこの頭痛が続いている。

イタッ！　という感じではなく少し気持ち悪い感じの痛みがずっと襲っている。

（熱も測ってみたが別になんともないし…どうなっているんだか）

フェリシアに移ったりしたら最悪なため帰りの際、薬を買おうと決めた。

「え、頭痛いからバイト休む?」

それから学校に行き鶴乃に事情を説明した。

「ああ、別に熱があるわけじゃないが頭痛が止まらなくてな」

「そうなんだ…でもなぜそのことを学校に来て言ったの? 普通に電話すればいいのに」

「学校を休みたくはなかったんだよ、皆勤賞が欲しいから」

「あはは、そうなんだ。学校を休まないのは良いことだけどホントに体調が悪いときはちゃんと休まないとダメだよ」

「はいはいそこらへんは分かってるよ」

「ちゃんと家に帰ったら手洗いうがいをして、妹さんに移さないようにマスクをするんだよ」

「お前は俺の母さんかっての」

鶴乃の額に痛くない程度にチョップをする。

(でも否定はできないな、色々とお世話になってるし)

「むう…あっそうだ! 今日怜君のお家に行ってもいいかな?」

「急にお前は何を言っているんだ」
　なぜ鶴乃が家に来ることになっているんだ。いや別に断るほどでもないがなにをするきなんだ。
「ほら今日怜君体調悪いじゃん？　バイトしているお礼に手料理と看病をしてあげるよ！」
「えっ、いや別に看病なんて…それに手料理とか、逆にこっちがお世話になってる身なのに」
「いいのいいの！　こういうのは断らないほうがいいんだよ」
「そっそうか、なら頼んだ」
「任せて！　家の手伝いが終わったらすぐいくから」
（さて、本当に了承してよかったものだろうか？　フェリシア怒るだろうなあきっと…でも鶴野には日頃お世話になってるし…まあそれよりも先にやんなくちゃいけないことがあるんだよなあ）
　鶴乃と廊下で別れたあとあちらこちらから男子の視線がささる。
　俺は別に鶴野とそんな関係じゃないが知らない人から見ればそれはもうそういう関係とみえるだろう。
（今ここで弁明しても焼け石に水だな、ここはもう黙るの一択）

できる限り男子たちの目を合わせないよう目線を下にさげ無言でこの場を去った。

▲

「ふう、今日は一段と疲れたなっと」

学校も終わり今日はどこも寄り道せずに家へと帰り、制服のまま自室のベッドに倒れこんだ。

（あっ薬貰ってくるの忘れた。まあ別にいっかとりあえず今は少し…寝……よ…ぅ）

最近寝不足なことからか眠りに入るのは早かった。

『ーーー』

どこからか声が聞こえる。

それは一人ではなく二人の声、一人は楽しそうに喋る少女の声、もう一人は少女の話を優しく聞き保護者のように接する男の子の声が聞こえた。

そして声と共にやさしい風が吹き草木が揺れる音が耳に入る。

（なんだろう…どこか懐かしく感じる…）

俺はゆっくりと瞼を上げ視界を広げる。

そこに映し出された光景はーーいつも見る一面の火の海だった。

▲

「……きて……起きて……怜君起きて！」
「……ん、鶴乃？」
　聞きなれた声で目を覚ますと俺の顔を上から覗いている鶴乃の姿があった。
「おはよ怜君。体調のほうはもう大丈夫？」
「あ、ああ一応な。頭痛のほうはもう治まったかんじかな……で鶴野はどうやって家に入ったんだ？　まあだいたい予想はつくが」
　扉のほうへ目をやるとそこには少し扉を開けてこちらの様子を見ているフェリシアがいた。
（でもなぜだろうかフェリシア目がなんか怖いんだけど、扉にひび入ってるし俺なんか怒らせたか？）
「うん、怜君の家の前でフェリシアと出会ってねそれで入れたんだ。でもびっくりしたよフェリシアが怜君の妹だなんて思ってもいなかったよ」
「なんだフェリシアとは知り合いなのか？」
「うん、ちょっと色々あってね…それよりも夕飯の準備はもうできてるから」

「あ、ああ分かった」
（色々って…まああとでフェリシアに聞くか）

▲

『ごちそうさまでした』
あれから鶴乃が作ってくれた手料理をご馳走してもらい大変満足した。
その際鶴乃に味のことを聞かれたが味は普通だったため５０点と言っておいた。
そしてフェリシアだが、先程からずっと俺のことを見ている。
食べる量は変わらないが不機嫌なのは分かる。
「なあフェリシア」
「…なんだよ怜兄」
鶴乃が皿を洗っている間にフェリシアと話そうとするが不機嫌なのは変わらなかった。
「なんか…すまん」
なにがとはいわないがとりあえずフェリシアに謝る。
「あいつとはどういう関係なんだ…」

「ただの同級生だ。後彼女の親が経営している店で働いているからバイト仲間でもあるな」
「…今日は飯くれたからいいけどまた女招いたら怒るからな」
「ああ、肝に命じておくよ」
頬を膨らまし嫉妬心を出すフェリシアも可愛いと思うが今回は流石に反省した。

▲

「さてやることもやったし寝るとしますか」
鶴乃が帰り、俺はやることを終えて早めに寝ようとしていた。
幸い鶴野がほとんど片づけてくれたので助かった。
フェリシアには悪いが移すわけにはいかないため今回だけ一緒に寝ることは断った。
（それにしてもあれから情報をつかめてないな）
魔女に襲われてから日にちも経ち一度も魔女やフェリシア以外の魔法少女に出会っていない。
（フェリシアよりも早く見つけなくちゃいけないんだ。アイツにこれ以上背負わせないためにも俺がやらなければ）

そんなことを考えながらゆっくりと目を閉じる。
隣にフェリシアがいないため部屋は静かだった。
そしてゆっくりと意識が落ちていき眠りについた。

そして次に目を覚ました時には知らない場所に立っていた。

7話

「うーん…一向に景色が変わらない」
あれからずっと階段を下っていたが一向に地面が見えない。
（このままずっとここにいるとかないよな…もしそうだったらとしたら……）
そこから浮かびある光景をすぐに否定し頬を叩く。
（諦めるな俺！　とにかく落ち着くんだ落ち着いてひとつひとつ整理しよう）
一回深呼吸をしてまた周囲を見回した。
結構歩いたにもかかわらず景色は一向に変わらない。
（…ああだめだ、こんなの見たら余計落ち着けなくなる）
階段に腰を掛け休憩する。
景色も変わらないから時間もわからず、このままここに居続ければ精神が持たないのが確実。
（それにしてもなんでこの空間は階段しかないんだ？　階段…そういえばクラスの女子達の会話で階段のことを話していたのを耳にしたような。確か≪≪ウワサ≫≫？　が

なんとかって言ってたような…）

「あの、すいません！」

「ああ、とうとう幻聴まで聞こえてきやがった。　思えば短い人生だった…」

「ええ⁉　し、しっかりしてください！　幻聴じゃありませんからちゃんとここにいますから！」

「まったくここに人がいるなんて奇跡が起こらない限りあるはずない…だ…ろ」

　幻聴だと思って聞いていた声のほうへ向くとそこには心配そうに俺を見ている少女が立っていた。

（き、奇跡が本当に起こっただとぉ!!）

　これには思わず驚いてしまった。ここにきてから数分ぐらいだろうか、それでもここで人に出会うのがとても長く感じる。

（見た感じ中学生ぐらいか？　それにこの子が着ている服装…もしかしてこの子魔法少女か？）

「あ、あの…」

「ああすまない、やっと人に会えたもんだから驚いちゃって。　俺は浅日怜、君は？」

「え、あ、はい！　私は秋野（あきの）かえでと言います。えっと…」

「怜(れん)でいいよ」
「はい！　怜さんはどうやってここに来たのですか？」
「あーそれについてなんだが俺もよく分からないんだ。　気づいたらここにいたって感じで。　君こそどうやって？」
「えっと…私も気づいたらここに…」
「なるほど、お互いにわからないか…」
（だが彼女と出会えたことは大きいぞ、ここから出れる可能性がまだゼロではないんだ。
　それに彼女、かえでの仲間が助けにくる可能性があるかもしれない）
「すいません怜さん、力になれなくて」
「いやそんなことはないさ、君には十分なぐらい助けられたさ。　君がいなければ俺はここで一生を終えるところだったよ」
　かえでは自分の不甲斐なさに落ち込んでるようだが現状一番役に立たないのは俺だ。
「えっと…ありがとうございます」
「うん、それじゃあ一緒に出口でも探しに行くか」
「はい、分かりました」
　さすがにここで待っててもなにも始まらないため、かえでと共に出口を探すことにした。

先頭は俺でかえでは杖を握りしめたまま後ろをついていく形となった。

「そういえば怜さん、怜さんはなんで私の服を見ておかしいと思わないんですか？　普通の人ならおかしいと思うはずなのに」
「ああ、家のところにも君と同じ魔法少女がいるから別におかしいとは思わないぞ」
（まあフェリシアの魔法少女の姿は一度も見たことないがな）
「そうなんですか!?　えっとちなみにその子のお名前は…」
「深月フェリシアっていうんだが、知ってるか？」
「深月…フェリシア…？　え…うそ…あの噂、ほんとだったんだ」
　俺がフェリシアの名を口にした瞬間かえでが驚いた様子で何かぶつぶつと独り言を言っている。
「どうしたかえで、急に独り言なんて…」
「まさかここで会えるなんて、怜さんがあの『傭兵の保護者』だなんて」
「え、なにその称号」
（一体なにがどうなったら俺が『傭兵の保護者』の称号がつけられるんだ。というか待ってくれ『傭兵の保護者』多分保護者は俺のことだと思うけど傭兵ってまさかフェリシア

のことか）

「あ、えっとすいません勝手に話しちゃって。　噂は聞いては聞いてはいたんですがほんとかどうかわからなくて」

「ちなみに、その噂はどんな内容か教えてくれないか？」

「はい、いいですよ」

前みたく断られると思っていたが快く彼女は了承してくれた。

一旦階段に腰をかけ休憩しながら彼女の話を聞いた。

（さーて、一体どんな内容なんだろうなあ…楽しみだな）

「うちのフェリシアがすいませんでしたぁぁ!!」

ここが階段にも関わらずに見事な土下座をする俺。

今この時にこの話が聞けて本当に良かったと思う俺。

話をまとめるとどうやら他の魔法少女が俺とフェリシアが一緒に帰っているところを見られたらしくそこから変な称号ができたらしい。

そしてここからが本題だった。　結論を言うとフェリシアが多くの魔法少女に迷惑をかけていた。

それを聞いた俺は即座に土下座した。

「え、えっと私は話をきいただけですのでその話がほんとうなのかわからないのですが」

「いや、アイツならきっとすると思うんだが…とりあえず話してくれてありがとうな、かえで」

「はい、こちらこそ聞いてくれてありがとうございます」

彼女の最初は申し訳なさそうな顔をしてたが感謝の言葉を贈ると彼女はえへへっと微笑んでくれた。

「さて、そろそろ行きま――――」

休憩もちょうど済んだので立ち上がろうとした瞬間、突然階段が揺れだした。

「きゃあッ！」

「あぶない！」

バランスを崩し倒れそうになるかえでを体で受け止める。

（くっ、どんどん強くなってきやがる。　いや揺れで気づかなかったが全ての階段が上に動いているのか）

身動きがとれないまま時間がたち揺れがおさまった。

「やっとおさまったか。　大丈夫かかえで」
「はい、私は大丈夫ですけど…さっきの揺れは何だったんでしょうか？」
　お互いに立ち上がり状況を確認する。
「なんだ、あれ？」
　俺は上を見上げると遠目でハッキリと見えないものの鐘のようなものを見つけた。
「鐘ですかね。　もしかしてあれが『絶交階段のウワサ』の本体？」
（『絶交階段のウワサ』？　初めて聞くな）
「なあかえ――ッ!?」
　かえでに声をかけようとした瞬間おぞましい気配を感じ取った。
　その気配に身の毛がよだつ、気配をたどると先ほど見た鐘から出ていることが分かった。
（なんだこの気配は、今まで感じことないぞ!?）
　冷や汗が頬を伝う。　ここを逃げなければと本能が訴えている。
　恐怖で声も出ず立ち止まっている俺を見てかえでは不思議に思い声をかけようとする。
「かえで！」
　声をかけようとした束の間、知らない少女の声がかえでを呼んだ。

その声のおかげで俺も意識を取り戻しその声の主を確認しようと振り向く。

「レナちゃん！」

振り向いた先、俺たちとは別の階段に立っている少女がかえでが言ったレナだろうか。

水色の髪でアイドルのような衣装を身に着けている少女は俺を見るやいやな睨みつける。

「かえでから離れて!!」

そういい少女は持っている槍の穂先を俺に向けた。